

「わたし」は誰？ —人間存在と意味世界—

“深き思索”は語った。「偉大なる問い”への“答え”は…」。
「イエス…！」。
「“人生”と“宇宙”と“すべてのこと”への答えは…」。“深
き思索”は続けた。
「イエス…！」。
「それは…」。“深き思索”は、そう言って言葉をとめた。
「イエス…！…？」。
「42 (Forty-two)」。“深き思索”は極めて厳かに、そして
穏やかに言った。
——ダグラス・アダムス『Hitchhiker’s Guide to the
Galaxy』

「あなたは、誰ですか？」

もし、誰かに突然真顔で質問されたとしたら、たぶん多くの人は返答に窮するのではないだろうか。最初に思い浮かぶのは、自分の名前かも知れない。でも、名前だけがその人のすべてではない。同姓同名の人物も世の中には沢山いる。かくいう筆者の氏名も極めて一般的な名前であり、実際に同姓同名の人（漢字表記も同じ）と机を並べた経験がある。

それでは、性別や国籍、職業や社会的立場などはどうだろう。こうした属性は、「わたし」の一面を説明することはできるが、どれも「わたし」のすべてを表すことはできない。社会的な立場が「わたし」のすべてであれば、地位を追われたり職を失ったりすれば、生きていくこと自体の意味を失うことになる。「あなたは、誰ですか？」という問いに対して、「わたしは、私です」と答えることも可能だろう。でも、その場合には「私とは誰のことなのか？」という疑問が残ることになる。

名前や性別、職業や社会的地位といった、「わたし」を取り巻く玉ねぎの皮のような属性をすべて剥いていったあとに、いったい何が残るのだろうか。かつては「属性」と「本質」を区別することで、素朴に本質としての「わたし」を想定することが可能であった。しかし、人間経験のあらゆる領域において価値の多様性が前提とされるようになった今日、このように単純な議論をすることはできない。

とはいえ、「あなたは誰ですか」という問いに答えるためには、つねに「わたし」の属性が必要であり、それらの属性は「わたし」を取り巻く「世界」における「わたし」の位置づけと深く関わっているのは確かである。日本という国が存在し、その国の教育制度がシステムとして存在していなければ、大学の教員の肩書きを刷った私の名刺には、まったく何の意味もなくなるだろう。

「わたし」の存在に意味を与えてくれる「世界」の存在。「あなたは誰なのか」という問いに答えるために、この「世界」とのかかわりが不可欠なことは確かである。では、その先にはいったい何があるのだろうか。玉ねぎの皮をむき切ったあとに、果たして何が残るのか。人間は、古くからこの問い—何も残らないという議論も含めて—に向き合ってきた。

*

冒頭に引用したのは、イギリスの脚本家ダグラス・アダムスのSF小説、『Hitchhiker’s Guide to the Galaxy (銀河ヒッチハイクガイド)』の一節である。銀河ハイウェイの建設工事のために、障害物となる地球が破壊されることから始まる、極めてナンセンスな空想小説だ。しかし、ところどころに深く考えさせられる記述があって、現在でも世界的に広く読まれている、というか、コアなファンが世界中にいる。

引用した会話は、世界の根源的な真理を問う「偉大なる問い (Great Question)」に答えるために、遙かな昔に極めて高度な知的生命体が、宇宙最大のスーパー・コンピューターを造り、750万年の時間—このような深遠な問いについて計算するには、これくらいの年限がかかるらしい—を経て、ついに答えを得たときのものである。

コンピューターの名前は、“深き思索 (Deep Thought)”。偉大な問いの内容は、人生 (Life) と、宇宙 (The Universe) と、すべてのこと (Everything) についてのシンプルで完全な答えを求めるというものであった。しかし、“深き思索”は750万年ものあいだ、ひたすら究極の答えを待ち続けた知的生命体たちに、なぜか計算の結果を告げることをためらう。それでも、執拗に答えを告げることを強要された“深き思索”は、しぶしぶ長年の計算結果を彼らに告げることになる。その答えは、「42 (Forty-two)」。

コンピューターは計算機なので、計算結果としての答えが数字になるのは当然のことだろう。しかし、答えは分かってもその意味が分からない。怒る知的生命体たちに問い詰められた“深き思索”は、もっと時間のかかるプロジェクトを提案し、それを「地球 (Earth)」と名づけることになる。

物語は、このプロジェクトをめぐるドタバタ劇として進行することになる。ここで全体のあらすじを紹介することは、たぶん紙幅と時間の無駄になるだろう。それでも、「人生 (Life) と、宇宙 (The Universe) と、すべてのこと (Everything)」についての究極の答えは確かにあるということ。しかし、その答えの意味は、それぞれが自ら探求しなくてはならない、といった作品のテーマ自体—コアなファンの深読みかも知れないが—には、心に響くところがある。

なぜ、人間には「偉大なる問い」への答えが必要なのか。どうして、究極の答えの意味は、どこまでも探求しなくてはならないのか。物語の第1巻は、「宇宙のはてのレストラン」に辿りつくところまで続いていく……。

*

つねに／すでに「答えられない問い」とともに在るという、この人間に固有の存在状況が、「わたし」の存在に意味を与えてくれる「世界」の構築を要請する。なぜ、人は名前を持ち、固有の言語を駆使し、社会的な役割や文化的な価値を身に纏うのか。なぜ、それらの属性は、自己の本質についての問いには答えてくれないのか。

まず、『人間はどこまで動物か』という著名な本から議論をはじめることしよう。